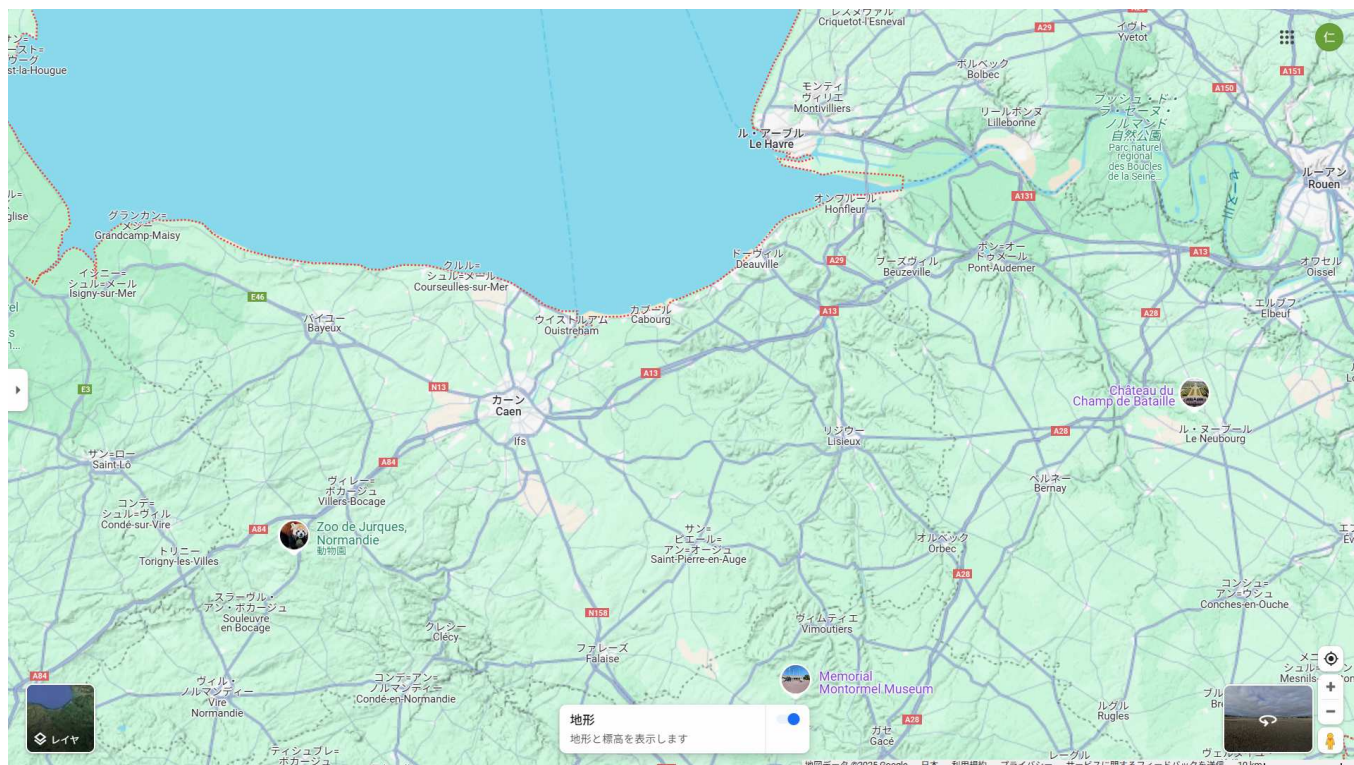


ノルマンディー Normandie

フランス共和国 ノルマンディー地方



ノルマンディーの訪問地 図の左下から中央近いカーンを目ざし、後にバイユー、英仏海峡沿岸を西から東に、ドーヴィル、オンフルール、そして右上のルーアンを経て、最後は右欄外のパリに戻った。

1999 年秋、その年アカデミー賞をとったハリウッド映画、『プライベート・ライアン』を立川の映画館で見た。第二次大戦の 44 年、ノルマンディーでの史上最大の作戦にまつわる作品だった。史実に基づいた作品としては、62 年の文字通り『史上最大の作戦』の方が概括的でストーリーを追いやすかった。が、戦争のリアリティーを体感するには、スピルバーグ監督のこの作品も秀逸だった。この地へと出かけたいという思いから、2000 年春、ノルマンディーの地に出かけた。

ブルターニュのレンヌから車を借り、まず向かったのは、これがかねてから行きたかったモンサンミッシェルだった。このモンサンミッシェルがノルマンディー地方の西南端で、そこから北東へとノルマンディーの海岸部を目ざした。途中、道を南にそれて、ファ

レーズ市の郊外にある小さな礼拝堂を訪ねようとしたが、直前の管理人への電話から、「4月はまだ公開していない」と聞き、断念。
※1 再び北へと向きをかえ、この地域の中心の一つ、カーン(Caen)の街に入った。

カーン市と『メモリアル』

カーンは、これからその戦跡を訪ねるノルマンディー上陸作戦で、ドイツ軍側の後背地と見なされ、6月6日の上陸後1か月間、連合軍の空爆によって徹底的に破壊された。その再建には十数年の歳月を要したと言う。

ここに訪ねたのは、市街地北側にある「メモリアル」と呼ぶ歴史博物館。モダンな建物だった。展示の中心は、やはり第二次大戦の帰趨(きすう)を決めたノルマンディー上陸作戦と、フランス側のレジスタンスに関する

ものだった。白黒の映像からは、レジスタンスがドイツ軍の進軍を妨害するため線路を爆破し、武器を載せた列車が脱線し堤を転げ落ちて行く映像が流れていた。壁のパネルには、動員された 5000 近い艦艇、グライダーを含む 1 万機近い航空機の向かった先が、描かれていた。上陸を敢行した兵員は米英そしてカナダの軍隊で、併せて 17 万人だった。地図にはノルマンディーの海岸が示され、西から米軍のユタ、オマハ、英軍のゴールド、カナダ軍のジュノー、さらに一部の仏軍を含む英軍のソード(いずれも作戦のコード名)が描かれていた。また参加した一部の実機が立体展示されてもいた。

ここでの予備学習を済ませて、いよいよ西方のバイユー(Bayeux)へと向かう。真っ直ぐの国道を行くと、フランスでは珍しい郊外型の大型スーパーがあり寄ってみた。売られていたパソコンは、何と日本の富士通製。日本では見かけない、廉価版のデスクトップだった。空腹だったので、食材を選んで食べられるコーナーでソーセージとマッシュド・ポテトを食べ、一息ついた。

バイユーはカーンから車で 30 分の距離。こちらは人口 1 万 3 千人と、中世の佇まいを残した静かな小都市と言ったイメージだ。宿探しは、直ぐに見つかった。その名もホテル・ル・バイユー。石造りの珍しい平屋だった。フロントに坐るアンリさんは愛想の良い初老の男性だった。早速、市内見学に出る。この地の大聖堂も、名称はパリと同じ聖母を意味する「ノートルダム」。華やかなファサードを持つゴシックの会堂だった。創建は 13 世紀。ゴシックはその時代、北フランスで生まれた様式だと言うから、この内外の意匠はゴシックの原型なのかもしれない、そう思った。

もう一つ、この街には戦時中、自由フラン

スを率いたドゴール(Charles de Gaulle)将軍(後の第五共和政の大統領)の足跡がある。ノルマンディー上陸作戦の最中、いち早くゴールド地区の海岸に上陸した将軍は、徒歩でこの街に入り、フランス共和国暫定政府を樹立した。街中には、その時滞在した館や、記念の像が立つ公園などもあった。

上陸作戦の地へ

さて翌日、再度バイユーへと戻ることと考えて戦場へのツアーを敢行した。まずは国道を西方へと進み、ラ・カンブ(La Cambe)という集落を越えた所に、ドイツ兵が眠る集団墓地があった。いかにもドイツ風のごつつい墓標の十字架が緑の芝生に整然と並んでいた。



ドイツ兵の集団墓地 ラ・カンブ, ノルマンディー

上陸作戦で犠牲となったドイツ兵は約 9000 人。多くはまだ十代の若い兵士だったと言う。当初は連合軍の犠牲者もここに埋葬されたそう。後に、より海岸に近い位置に移設され、今はドイツ兵墓地と呼ばれている。入り口近くに展示スペースがあった。1954 年、戦死者墓地についての仏独条約が締結されて以来、ラ・カンブはこの地域に設けられた 6 つのドイツ兵墓地の一つとして整備されて来た。ここはドイツのヴェルツブルク郊外の村と姉妹提携し、二度と戦わないという決意の下、相互の和解の促進を図って来たと

言う。

県道を北へと車を走らせ、間もなく海岸に達した。グランカン・メイジー (Grandcamp Maisy) という集落を東へ抜けると、道は高台になり、そこから北へ突き出ているオック岬 (Pointe de Hoc) へと足を伸ばす。アメリカ軍が上陸したオマハ海岸の直ぐ西に位置する。44年6月6日、Dデイと呼ばれた上陸開始の日、この岬の砲台を攻略するため、連合軍は事前の空爆を行い、続いて米軍のレインジャー部隊が上陸。その崖を決死の覚悟でよじ登った。犠牲も出たが、間もなくこの上の砲台を攻略した。それは空爆が功を奏し、コンクリートのトーチカの殆どが破壊されていたから。車を停めて、崖を上がって来る潮風に吹かれながら、今もそのままのコンクリートの残骸の間をしばし歩いて見た。崖際からは、わずかに霧がかかる英仏海峡を眺めることができた。

そこから東に走り、ヴィエルヴィル (Viervill sur Mer) から下ってついにオマハ海岸へと出た。黄色い砂浜が続く海沿いを走る。あいにく暗い曇天で何となく印象が薄くなるが、米軍が上陸するには好適地だったろう、延々と続く砂浜の海岸線だった。この地での米兵の犠牲は、凄まじいものがあつた。他の海岸では、連合軍の空爆が効果的で、ドイツ兵は有効な反撃ができなかったと言う。一番東のソード海岸などは、ドイツ兵の反撃を受けることもなく、難なく上陸に成功したと言う。

ところが、オマハ海岸はそうは行かなかった。ここでは、直前の空爆の目標がそれて、迎え撃つドイツ軍陣地を外していた。米軍の上陸用舟艇は、正面から激しい銃弾にさらされた。しかも、後続の部隊も次々と海岸に押し寄せ、先頭の兵士たちを踏みつけて前進する有様だったと言う。当時の白黒写真や映画

『プライベート・ライアン』の戦闘シーンが思い出される。米軍は、血みどろの戦いを強いられながらも、その数で圧倒した。そして4000人も多大な犠牲を払うことになった。



激戦となったオマハ海岸 1944年6月

一旦、内陸の台地に上がって東へと進むと、コルヴィル (Colleville-sur-Mer) の街の手前海側に、大規模な米軍の墓地が広がっていた。ここには、いかにもアメリカらしい緑の芝地に白い墓標が整然と並ぶ光景があつた。崖の上にあるため、ちょうど戦場となったオマハ海岸を見下ろす位置だ。『プライベート・ライアン』の冒頭と最後に映し出された、あの戦没者墓地だった。

ここまでで大分時間を費やした。そこで、この日は先へ進まずバイユーまで戻り、今日も空き室があつたホテル・ル・バイユーでもう一泊することになった。そして、朝を迎えた。

バイユー・タペストリー

実は、バイユーには、もう一つ訪ねたいところがあつた。ホテルから徒歩で行ける距離に、『ウィリアム征服王文化センター』※2があり、ここに納められている、バイユー・タペストリーを見ておきたかったのだ。タペストリーとは言え、壁にかけるような代物ではなく、延々横 70mにも及ぶ絵巻物と思えばよい。それが布製だと言うわけだ。

ここノルマンディーは、その名の通り北欧起源のノルマン人がフランスに築いた公国だった。11世紀前半、ギョーム公の時、海の向こうイングランドでは、従兄弟のエドワードが王座についていた。子のない王が後継として指名したのは、結局、義兄のハロルド2世だった。1066年のことである。

これにギョームは異を唱(とな)え、数千の兵と共に英仏海峡を渡り、ヘイスティングス(Hastings)の街に上陸した。そこから内陸のハロルドの陣営に急行し、これを撃破した。タペストリーはその経緯を、歴史絵巻として描いている。それぞれのシーンを興味深く見たが、ハロルドがイングランド王に即位した直ぐ後で、夜空には彗星が現れ、煌々と光を放ったという。1066年は、ちょうどハレー彗星が地球に接近する年で、これが描かれていた。王の側近たちは、彗星を悪い予兆では？と慄(おのの)いたと言う。



展示されていたタペストリー 海峡越えの場面

その予想通り、ハロルドは陣営で没した。これにより、アングロ・サクソン系の王朝は断絶した。勝利したギョームは、イングランド王ウィリアム1世となり、ここに英仏にまたがるノルマン王朝を開くことになった。今日に至るまで、英国とフランスとは互いに影響を与えて来た国だ。身近では、英語の語源にフランス語からのものが多いことは、ご存知だろう。例えばチャールズ(Charles)という人名はフランス語のシャルル(綴りはそのまま Charles) から来ている。こうした因縁

浅からぬ英仏関係の出発点が、この争いだったと言えると思う。

オンフルール(Honfleur)へ

バイユーからは東へ、カーンまで戻り、そこからまた北側の海岸に沿った道を行く。夕刻が迫って来たので、海辺のブロンヴィル(Blonville=sur=Mer)で一泊した。翌朝、直ぐ東の有名リゾート地、ドーヴィル(Deauville)に立ち寄る。映画『男と女』の舞台となった街である。季節外れのためか、ノルマンディーより更に遠浅の広々とした浜辺に観光客の姿はなく、間もなく、そこを後にした。

近年にわかに知られることになったオンフルール(Honfleur)は、セーヌ河(Seine)の河口に位置し、海岸から一步退いた分流、モレル川の奥に旧港をもつ魅力的な家並みの街だ。画家ウジェーヌ=ブーダン(E. Boudin)の生地でもあるが、私には好きな作曲家エリック=サティー(Erik=Satie)の生家があるので立ち寄りたと思っていた所だ。ハーフ・ティンバー※3の家々が続くひなびた漁師町を思わす一画に、サティーの家(Maison Satie)が博物館を併設して、開いていた。

開館2年と新しく、展示内容は、単なる音楽家の足跡をたどる施設と言うより、サティーにまつわるトピックを流行りのインスタレーションで見せるものだった。彼が自作した多数のピアノ曲の一つに、「梨の形をした三つの小品」がある。その(洋)梨が、施設のシンボルとして使われていた。

サティーはこの地とパリとを、20歳になるまで行ったり来たり。その間、音楽修行の日々を過ごした。その後、パリ音楽院に入学したのをきっかけに、パリの下町モン・マルトルに転居した。同時代のドビュッシーやラヴェルが築いた印象派の洗練に、ちょっぴり

諧謔を加えた旋律を残した。帰り際にショップで見かけたのが、洋梨が表紙絵のCD。これを大変気に入った私は、今もその冒頭に収録されたアンネ=ゾフィー=シュミットというソプラノ歌手の『ジュ・トゥ・ヴー (Je te veux)』をお気に入りになっている。



オンフルールの旧港

オンフルールの中心は、モレル川と繋がった長方形の旧港辺り。この辺りの風景はどこを切り取っても絵になりそうだった。丁度、この頃、水彩画家の安野光雅さんが、NHK テレビの美術講座に登場し、この旧港を題材に写生していたことを思い出す。旧港の入口には、総督の館だった石造りの砦があり、風情ある外観を遺していた。その間近にある聖カトリヌ教会(Eglise Sainte=Catherine)は、フランスでも唯一無二の木造建築の聖堂で、そのハーフ・ティンバーの外観も木の板で仕上げられた内壁も、一種独特の雰囲気を出していた。それもそのはず、この制作にあたったのが船大工たちで、その天井など船底をひっくり返して造られたのではと思える不思議な作りだった。石造りの会堂を見慣れている私には、貴重な経験だった。

ルーアン(Rouen)にて

さて、オンフルールからは、セーヌ河に沿って、パリ方向に上って行く。途中から高速道路のA13号線が合流し、速度を上げた。しかし、ドイツのアウトバーンとは異なり有料

で、途中の料金所で持ち合わせのない現金のみのゲートに入ってしまう、そこの管理人にカード決済させてくれと頼みこむトラブルに見舞われた。よくあることらしく、担当のマドモアゼルは卒なく対応してくれた。

ルーアンは、ノルマンディー地方の首府とされる街で、人口約10万人。中心市街地はセーヌ河の右岸にある。車で左岸から橋を渡り、大聖堂(こちらもノートルダム!)の近くに宿を探した。この街では、フランスを救った英雄、ジャンヌ・ダルク(Jeanne d'Arc)の足跡を訪ねることになる。大聖堂から西へ数百メートル行った所に、旧市場広場(Place du Vieux-Marché)があった。その一画に大きな十字架の塔を付設したモダンなジャンヌ・ダルク教会が建っていた。

ジャンヌが歴史に登場したのは、百年戦争の終わり近く、フランス王シャルル7世の窮状を救ったオルレアンからだ。そしてこのルーアンは、英軍に奮戦したジャンヌがそれと繋がるブルゴーニュ公の軍に捕らえられ、英軍に引き渡されて異端審問に掛けられ、そして最後は、火刑と言う非業の死を迎えた場所だ。1431年5月30日のことだった。

ステンレス製と思われる十字架の塔の正にその場所で、天に召されたと言われる。この男装の麗人の死が、多くのフランス人に追憶の対象とされることを恐れ、執行者は遺体を跡形もないように焼き尽くし、その灰を近くのセーヌ河に捨てたと言う。しかし、ジャンヌの後を受けたフランス勢力は、その20年後、ここノルマンディーを回復し、英軍は海峡の向こうに追われたと言う。ここに百年続いた英仏戦争は終わることになった。

死後、半世紀も経たぬうちに、ジャンヌはフランスのカトリック教会から名誉を回復された。そして20世紀に至り、聖人へと列せられた。この地はその死を悼む人々によっ

て巡礼の地とされている。考えて見ると、これもまたノルマンディーが久しく英国王の領地であったことと、無関係とは言えない。近くのレストランで軽い夕食の後、狭い路地の商店街をぶらついた。そして入ったチーズ(Fromage)屋さんで、地元のカマンベール・チーズを見つけた。ノルマンディー地方のグルメの一つがこれである。生ものなので、帰りの成田で没収されるかもと心配しつつ、一つ購入した。結局、これは無事我が家に持ち帰り、そのおいしさに舌を巻くことになった。



大聖堂と旧市場広場の中間にある大時計

ルーアンが、ブルターニュのレンヌから始まったドライブ旅行の最後の宿となった。翌朝、宿の領収書を近くの公共駐車場で提示し、ほぼ無料で出庫した。この後、セーヌ河を渡り返し、A13 をさらに東にパリをめざした。そこに達すると、環状道路に掲げる飛行機のサインをたどりながら、空港をめざす。車窓の右に遠く、エッフェル塔が眺められた。程なく、パリ郊外のシャルル・ドゴール空港に無事帰着した。

※1 ファレーズ近郊のサン・ヴィゴール・ド・ミューにある「林檎の礼拝堂」のこと。これを製作したのが、日本の現代美術家、田窪恭治氏で、残念ながら見られなかったが、この礼拝堂の平面を地面に描いたオブジェとして、箱根の彫刻の森美術館の一角に野外

展示物がある。

※2 センターの現在の名称は「バイユー・タピスリー博物館」と改称されている。

※3 ハーフ・ティンバーとは、木の柱が縦に横に斜めにと露出した白い京壁のような外観のものを言う。ティンバーは材木の意。左の写真の、大時計の右にある赤い外観の意匠も、それに当たる。